

国立民族学博物館特別展「多みんぞくニホン」を教育現場に生かす

著者	織田 雪江
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	64
ページ	233-252
発行年	2006-12-28
URL	http://hdl.handle.net/10502/1939

国立民族学博物館特別展「多みんぞくニホン」を教育現場に生かす

織田 雪江

1 はじめに

特別展「多みんぞくニホン」がまだ準備段階の頃、京都YWCA・APT¹⁾という滞日外国人を支援するグループのミーティングで、展示物収集のお知らせを聞いた。そうした展示物収集のやり方も驚きだったし、現在進行形の事柄を対象として、どんな展示が出来上がるのか楽しみにしていた。そして完成した展示は、これから作成に取りかかろうとしていた新しい授業のカリキュラムに、自分自身が大きく関心を寄せてきた在日外国人をテーマにした章立てをつくることを後押ししてくれた。

本校(同志社中学)では地理的分野を社会A、歴史的分野を社会Bと呼んで、1年生から2年生まで並行して学習する。特別展の開催された2004年度は、1年生で社会Aを教えた生徒を2年生でも続けて担当することになっていて、1年間共に学んできた生徒を対象に、新しい授業の試みができることも時を得ていた。

実は2年生の日本地理のカリキュラムを作成するのは6・7年ぶり、1年生の世界地理を中心とする社会Aは、開発教育²⁾に基づく参加型の授業のカリキュラムがつけられてきたこととは対照的に、立ち遅れていると感じていた。足元の日本社会を誰にとっても住みやすい公正な社会にするために、日本に住む多様な人びとについても、もっと理解を深め、彼らの直面する問題や、それらが私たちの生活とつながっていることを知る必要性が、急速に増してきている。1年生の最初に『地球家族』のフォトランゲージ版を用いたワークショップを行い³⁾、世界の多様性や共通点や不公正などに気づいたことに合わせて、2年生の社会Aの最初の単元において、「多みんぞくニホン」から学習することは、生徒にとっても自然な流れだった。

2 授業実践「多みんぞくニホン」

以下は特別展の開催年度から翌年度にかけて、特別展「多みんぞくニホン」を社会Aに取り込み実施した授業実践のまとめである。指導案の書式は、国立民族学博物館調査報告書56『国立民族学博物館を活用した異文化理解教育のプログラム開発』(森茂2005)に習った。

1. 単元名 多みんぞくニホン		
2. 対象：同志社中学校2年生 授業者：織田雪江	3. 国立民族学博物館の資料との関連： 庄司博史編『多みんぞくニホン —在日外国人のくらし』 国立民族学博物館，2004年。	
4. 教科領域との関連性： 中学社会科地理的分野		
5. 実施時期： 日本の地域について学ぶ最初が望ましい。	6. 総時間数：12時間 (礼拝レポートの時間も含む)	
7. 単元のねらい ・外国にルーツを持つことの楽しさに気づく。 ・外国にルーツをもつことの大変さに気づき，その背景を知る。 ・お互いの違いを認めて，尊重しあう社会をめざす取り組みを知り，参加に向けての態度を養う。	8. キーワード 多文化共生 在日外国人 人権 課題学習	
9. 単元について（教材観・単元設定の理由・民博活用の視点など） 地球上に住む誰もが本当に豊かに暮らせる公正な社会の実現のために，主体的に参加しようとする姿勢を養うには，さまざまな学習テーマが考えられる。そのテーマのひとつとして，在日外国人を取り上げたい。滋賀県から通学する生徒は在日ブラジル人の生徒と，京都府や大阪府の生徒は在日中国人や在日フィリピン人の生徒と小学校時代に出会っていたり，本校にも在日コリアンなど外国にルーツを持つ生徒が在籍している。そこで，彼らの多様な背景を尊重したり，彼らの直面する問題を身近なこととして「考え」「行動する」チャンスがある。また，体系的に多民族化の歴史的背景や制度上の問題点なども「知る」必要があると考えるからだ。 さて，本校のチャペルの横には，植民地時代に同志社大学に学んだ尹東柱の詩碑があることから，1年生の社会Aの「韓国から学ぶ」という単元に時間をかけて取り組んでいる。本単元はその延長上に位置づけられ，より今日的な課題として取り組むことができる。また，外国人登録者数だけでも200万人近くなり，今後ますます増加すると予想される中，どの地域でも学ぶ必要のある普遍的なテーマになるだろう。 この単元のねらいは，小谷論文（小谷 2004）の「多みんぞくニホンをいきる子どもたちへ」と題した文章を参考にした。これらは開発教育を意識した社会Aのカリキュラムで，年間のねらいとしてあげているものと重なる。展示解説書は，授業のねらいから始まって，生徒に配布する資料としてもおおいに活用した。		
10. 展開記録		
次・時	主な学習活動と生徒（学習者）の意識	留意点・資料
2時間	1. 多みんぞくニホン グループワーク（導入） ポスターに書かれている日本で使われている1～7の言語は何？ 写真の人や看板をヒントに考えてみよう。	・（資料）特別展「多みんぞくニホン」の大型ポスター8枚をラミネートして教材化。

<p>5 時間</p>	<p>プリントを読んで、この単元のねらいを共有する。</p> <p>作業：在日外国人の人口と割合を、外国人登録者数のグラフを着色しながら確認しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グラフから読み取れることを上げよう。 ・在日コリアンの人口が減少しているのはなぜ？ <p>2. 多民族化への過程</p> <p>[在日コリアン]</p> <ul style="list-style-type: none"> ○1年生で学習した植民地時代について簡単に復習する⁴⁾。 ○サンフランシスコ平和条約以降の在日コリアンの法的地位の変化について。 <ul style="list-style-type: none"> ・国籍条項とは？ ・特別永住者とは？ ○1970年代の市民権を求める運動を通して、どのような権利を回復してきたか、また今後どのような課題が考えられるか。 <ul style="list-style-type: none"> ・参政権は？ ・自由に職業を選ぶ権利は？ ・国民健康保険は？ <p>[在日中国人]</p> <ul style="list-style-type: none"> ○日本のチャイナタウンはどこにある？ チャイナタウンのおこり。(老華僑) ○改革開放政策以後の留学生・就学生の増加と、入管法改正による研修生増加について。(新華僑) <ul style="list-style-type: none"> ・研修生とは？ ○日中国交正常化以降の中国残留孤児の帰国。日本社会での自立支援とその現状について。(中国帰国者) 	<ul style="list-style-type: none"> ・2004年度の特別展ポスターで、今日的なテーマであることを印象づける。 ・(資料) 小谷論文「多みんぞく日本をいきる子どもたちへ」(小谷 2004) ・(資料) 古屋論文(古屋 2004)よりプリント作成。 ・在日コリアンの帰化は25万人を越え、朝鮮半島にルーツのある人はもっと多い事に触れる。 ・在日コリアンという呼称について説明。 ・(資料) 古屋論文(古屋 2004 : 34-35)より作成した用語解説プリント。 ・1年生で学習した1960年代の公民権運動とも関連づけて説明する。 ・社会保障については、公民的分野での学習内容を多く含み、取り扱いに検討を要する。 ・中国側のpush要因と日本側のpull要因の両面から押さえる。 ・(資料) 毎年11月の訪日調査の時の新聞記事。
-------------	--	---

<p>5時間</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・訪日調査の名簿に書かれた「手がかり」を読んで彼らのおかれた状況を想像してみよう。 <p>[在日ブラジル人]</p> <ul style="list-style-type: none"> ○様々な世界地図でブラジルの位置を確認。 <ul style="list-style-type: none"> ・なぜ、こんな遠い国から働きにくることになったの？ ○日本人のかつての海外移住について。 ○バブル期以降の労働力不足を日系ブラジル人に求めたことと入管法改正について。 ○生活支援が不十分なままでの日本の生活でどのような困難が考えられるか。 <ul style="list-style-type: none"> ・日本語と母語のこと。 ・どんな仕事を担っているのだろうか？ <p>[在日フィリピン人]</p> <ul style="list-style-type: none"> ○フィリピンの海外雇用庁が海外で働くことを促進している事情について。 ○1980年代のバブル期のエンターテイナーの需要を海外に求めたこと。 ○フィリピン人支援のためのNGOの紹介。 <p>3. 課題「多みんぞくニホン」</p> <p>「外国にルーツを持つことの楽しさ」や「お互いの違いを認めて尊重しあう社会をめざす取り組み」を探して発表する。</p> <p>テーマを決める。</p> <p>図書館で、インターネットに課題プリントのキーワードを入力しながら、自分のテーマを考える。</p> <p>課題発表</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表順を入れたクラスごとのプログラムを配布。 	<ul style="list-style-type: none"> ・世界地図は目的に応じて有効に使えることに触れる。 ・ブラジル側のpush要因と日本側のpull要因の両面から押さえる。 ・(資料)小谷論文(小谷 2004) ・中国帰国者の自立支援と比較してみる。 ・英語圏でのフィリピン人の様々な職業を紹介する。 ・(資料)古屋論文(古屋 2004 : 34-35) より作成した用語解説プリント ・在留資格によって職業に制限を加えている事に触れる。 ・(資料)課題プリントは、発表テーマについて、できるだけ多くの具体例をあげる。 ・発表順を決める ・昨年度の生徒の作品を例に3分の原稿量や発表の仕方を紹介する。 ・発表後、模造紙は各教室に掲示する。優れた作品は3学期の教科展でも紹介する。
------------	--	---

11. 評価計画

- ・外国にルーツをもつことの楽しさや大変さに気づく。また大変さについては、それを克服するための取り組みを知ることができた。
- ・課題に合ったテーマを自分で決めて調査や発表ができる。また他の人の発表を聞いて、学びを共有することができた。
- ・外国にルーツを持つ人に出会い、対話しながら、課題に取り組むことができた。
(発言・考査・礼拝レポート・課題の取り組み過程と発表・課題プログラムの記述)

12. 授業づくりのための参考資料

- ・梁泰昊・川瀬俊治著『知っていますか？在日韓国人・朝鮮人問題一問一答 第2版』解放出版社，2001年。
- ・仲原良二著『知っていますか？在日外国人と参政権 一問一答』解放出版社，2000年。
- ・丹羽雅雄著『知っていますか？外国人労働者とその家族の人権 一問一答』解放出版社，1998年。
- ・姜尚中著『在日』講談社，2004年。
- ・日高六郎監修・社団法人神奈川人権センター編集・発行『改訂版 国際化時代の人権入門』明石書店，1997年。
- ・丹羽雅雄著『マイノリティと多民族社会—国際人権時代の日本を問う』解放出版社，2003年。

3 学年礼拝「多みんぞくニホン」と連動して

さて特別展を取り込んだ社会Aの授業の準備を進めていく過程で、課題発表のための現地調査以外の場面でも、生徒全員が実際に「多みんぞくニホン」をつくる人びとと出会える機会をつくることにした。そのために学年礼拝の時間を活用することにし、この企画の趣旨を宗教部の教員に説明し理解を得て、外部講師としてお話を依頼することが可能になった。

学年礼拝は、毎週水曜日の朝8時10分から、同志社中学校のチャペルで行われる。奨励（礼拝のお話）の時間は最大で15分ぐらいではあったが、外部講師として以下の方々を招聘することができた。

〈2004年度〉 4月21日 陳 天璽 (CHEN Tien-shi) さん

国立民族学博物館助教授

4月28日 リリアン・テルミ・ハタノさん

甲南女子大学多文化共生学科助教授

5月12日 孫 美幸 (そん みへん) さん

立命館大学大学院生・元公立中学英語科教員

(2005年度) 4月27日 孫 美幸(そん みへん)さん

同上

5月11日 朴 聖愛(ぱく そんえ)さん

同志社高校三年生

5月18日 朴 永台(ぱく よんて)さん

同志社大学校友会コリアクラブ⁵⁾

6月15日 濱頭桃子(はまがしらももこ)さん

同志社大学三回生・京都YWCA/APTボランティア

2004年度は、「在日中国人」「在日ブラジル人」「在日コリアン」の方に依頼し、授業で取り上げる枠組みに合わせるかたちとなった。2005年度は、引き続き孫美幸さんがお話を受けて下さることになり、今度は生徒にとって最も身近な「在日コリアン」の人びとに焦点を絞って、異なる世代の人にお話しを依頼しようと考えた。さらに、新しい試みとして、滞日外国人支援のボランティアを行う大学生にも講師をお願いした。

お話を聞いたあとの授業時には、10～15分程度で、気付いたこと・印象に残ったことを短いレポートに書き留めた。提出されたレポートを通して、生徒と対話できるのはうれしかったし、コメントと評価をつけて必ず生徒に返却した。

生徒のレポートを読むと、礼拝の話は授業内容の理解を深めることになっていた。例えば通名と本名の話から創氏改名についても考える機会が与えられたし、帰化などについても授業で触れていたにもかかわらず、レポート作成時に初めて生きた知識となったようだ。2005年度は世代の異なる在日コリアンの人びとが話す時代背景から、社会が確実に変化していることを感じた生徒も多かった。

また、自分たちの目の前でそれぞれの経験から語られるお話から、強い印象を受けていることもある。偏見や制度上の差別があることも、ひとりの人のライフストーリーとして聞くことによって「こんなことは許せない！」という怒りの感情とともに記憶されるのではないかと思う。

そして、「こんなふうに頑張りたい！」と目標とするべきモデルを見たような感想も多く、それはこちらの期待するところでもあった。なぜなら、お話の内容を他人の問題として終わらせないために、廣瀬聡夫(人権NPO法人ダッシュ 2002:48)が言うように、「自分自身の人権の向上、自己実現のヒントを得ることができるというプラスの出会いが必要」だと考えるからだ。

4 課題「多みんぞくニホン」の発表を終えて

特別展を取り込んだ社会Aの授業実践の最後に行った生徒の課題発表は、この単元の授業実践の中で最も重要な位置を占めることになった。生徒自身が自ら調査し、人と出会い、新しい発見をしながら発表したことは、それまで私が何時間かにわたって授業してきたことより、はるかに自分のものになったと思う。ここでは生徒の取り組みの様子や作品を紹介しながら、考察してみたい。

4.1 生徒の取り組みの様子

年間のカリキュラムを考えると、一人あたりの発表時間を2.5分～3分と短く設定せざるを得なかったし（現地調査のある場合は3人まで共同発表できる）、普通教室での発表なので、視聴覚機器も使えない。このような条件で、どんな発表ができるのか。発表までの学びの過程に意味があると考え実施に踏み切っていたものの、正直、不安もあった。しかし実際に始まってみると、こちらが思いも及ばなかった工夫が見られ、生徒の力に驚かされることになった。

2004年度は特別展の開催中、表1にあるように323人中70人の生徒が民博を訪ねた。さらに73人の生徒が現地調査を試みて、両者を合わせて全体の半数近い143人の生徒が外に学びの場を求めた。残りはインターネットや文献による調査だ。どのような調査をするかは生徒それぞれの裁量に任せていたので、半数が外に学びの場を求めたことにほっとした。

2005年度は、図書・情報部の協力を得て、図書室でテーマを決定する時間を1時間設けた。ひとりひとりがインターネットを用いて、課題プリントにあるキーワードを入

表1 2004年に現地調査した生徒数（民博見学を含む）

クラス	国立民族学博物館	現地調査		
		南京町	コリアタウン	その他
A組	9	3	1	6
B組	6	2	9	8
C組	8	6	0	3
D組	3	3	2	4
E組	9	1	0	4
F組	14	4	0	0
G組	11	6	1	3
H組	10	3	1	3
小計	70人	28人	14人	31人
合計		143人		

その他に含まれるもので、3名以上が調査したのは、多言語看板調べ8名、京都市国際交流会館7名。

れながら検索し、テーマを決めた。必要な資料は無料で印刷できたし、現地調査のための交通機関を調べ始める生徒もいた。また、この単元を学習している期間中、図書室に関連図書を集めたコーナーも設置された。そして民博の特別展がない中でも、表2のように昨年を上回る166人の生徒が現地調査にかけた。最も多かったのは昨年同様、既に観光地としても定着している南京町で、次いで、本校から歩いて5分ほどのとこ

表2 2005年度に現地調査した生徒数

クラス	現地調査			
	南京町	コリアタウン	バザールカフェ	その他
A組	12	0	4	5
B組	5	3	0	7
C組	6	0	0	18
D組	7	6	10	3
E組	4	4	2	1
F組	15	1	2	7
G組	8	3	4	9
H組	13	0	5	2
小計	70人	17人	27人	52人
合計	166人			

その他に含まれるもので、3名以上が調査したのは、中華料理店11名、京都市国際交流会館6名、多言語看板調べ5名、韓国料理店5名、高麗美術館3名、ブラジル専門店3名。

表3 「多みんぞくニホン」課題発表のプログラム

氏名	発表者	テーマ	発表時間	調査方法(現地調査/他者/インターネット)	調査内容(現地調査/他者/インターネット)	発表内容	発表時間
D組	宮脇 達也	神戸、南京町について	2	現地調査	南京町、神戸の歴史、観光地、食文化、多言語看板の調査	南京町、神戸の歴史、観光地、食文化、多言語看板の調査	5月21日(木)11人分
	石川 陽	韓国の慶徳市	4	現地調査	韓国の歴史、文化、観光地、食文化、多言語看板の調査	韓国の歴史、文化、観光地、食文化、多言語看板の調査	6月7日(木)11人分
E組	小寺 美子	ハルビンから	8	現地調査	ハルビンの歴史、文化、観光地、食文化、多言語看板の調査	ハルビンの歴史、文化、観光地、食文化、多言語看板の調査	6月10日(日)11人分
	村上 道隆	ハルビンから	8	現地調査	ハルビンの歴史、文化、観光地、食文化、多言語看板の調査	ハルビンの歴史、文化、観光地、食文化、多言語看板の調査	6月14日(木)8人分
F組	西田 聖一	韓国の歴史(韓国/対馬/対馬/対馬)	9	インターネット	韓国の歴史、文化、観光地、食文化、多言語看板の調査	韓国の歴史、文化、観光地、食文化、多言語看板の調査	6月14日(木)8人分
	大山 圭一郎	多言語の看板	10	インターネット	多言語の看板の調査	多言語の看板の調査	6月14日(木)8人分
G組	木下 文成	韓国の歴史	11	インターネット	韓国の歴史、文化、観光地、食文化、多言語看板の調査	韓国の歴史、文化、観光地、食文化、多言語看板の調査	6月14日(木)8人分
	堀井 良守	韓国の歴史	11	インターネット	韓国の歴史、文化、観光地、食文化、多言語看板の調査	韓国の歴史、文化、観光地、食文化、多言語看板の調査	6月14日(木)8人分
H組	西川 龍太郎	生野のKOREAを調べて	15	現地調査	生野のKOREAを調べて	生野のKOREAを調べて	6月14日(木)8人分
	西田 淳人	生野のKOREAを調べて	15	現地調査	生野のKOREAを調べて	生野のKOREAを調べて	6月14日(木)8人分
I組	加藤 英樹	ベトナムの衛生	19	インターネット	ベトナムの衛生	ベトナムの衛生	6月14日(木)8人分
	櫻村 巨	ベトナムの衛生	19	インターネット	ベトナムの衛生	ベトナムの衛生	6月14日(木)8人分
J組	高田 幸晴	韓国 朝鮮	20	インターネット	韓国 朝鮮	韓国 朝鮮	6月14日(木)8人分
	久末 幸雄	韓国 朝鮮	20	インターネット	韓国 朝鮮	韓国 朝鮮	6月14日(木)8人分
K組	松田 貴樹	バザールカフェへの見学	22	現地調査	バザールカフェへの見学	バザールカフェへの見学	6月14日(木)8人分
	村上 真直哉	バザールカフェへの見学	22	現地調査	バザールカフェへの見学	バザールカフェへの見学	6月14日(木)8人分
L組	藤田 孝太郎	京都の外国人の窓口	23	インターネット	京都の外国人の窓口	京都の外国人の窓口	6月14日(木)8人分
	金井 通夫雄	京都の外国人の窓口	23	インターネット	京都の外国人の窓口	京都の外国人の窓口	6月14日(木)8人分
M組	佐藤 志織	中国の食文化	27	インターネット	中国の食文化	中国の食文化	6月14日(木)8人分
	前田 真一	中国の食文化	27	インターネット	中国の食文化	中国の食文化	6月14日(木)8人分
N組	井上 麗	第九番町に於いて	27	現地調査	第九番町に於いて	第九番町に於いて	6月14日(木)8人分
	丸山 雅	第九番町に於いて	27	現地調査	第九番町に於いて	第九番町に於いて	6月14日(木)8人分
O組	高田 幸晴	中国(上海)のイベント	32	インターネット	中国(上海)のイベント	中国(上海)のイベント	6月14日(木)8人分
	加藤 英樹	中国(上海)のイベント	32	インターネット	中国(上海)のイベント	中国(上海)のイベント	6月14日(木)8人分
P組	三浦 洋平	韓国の食文化	34	現地調査	韓国の食文化	韓国の食文化	6月14日(木)8人分
	安原 空太	韓国の食文化	34	現地調査	韓国の食文化	韓国の食文化	6月14日(木)8人分
Q組	藤田 孝太郎	多言語の看板	35	インターネット	多言語の看板	多言語の看板	6月14日(木)8人分
	村上 真直哉	多言語の看板	35	インターネット	多言語の看板	多言語の看板	6月14日(木)8人分
R組	藤井 萌子	南京町へ歩き	37	現地調査	南京町へ歩き	南京町へ歩き	6月14日(木)8人分
	堀本 奈穂紗	南京町へ歩き	37	現地調査	南京町へ歩き	南京町へ歩き	6月14日(木)8人分
S組	内田 桃香	南京町へ歩き	37	現地調査	南京町へ歩き	南京町へ歩き	6月14日(木)8人分
	井上 麗	南京町へ歩き	37	現地調査	南京町へ歩き	南京町へ歩き	6月14日(木)8人分
T組	加藤 英樹	ハルビンから	38	現地調査	ハルビンから	ハルビンから	6月14日(木)8人分
	高田 幸晴	ハルビンから	38	現地調査	ハルビンから	ハルビンから	6月14日(木)8人分
U組	藤田 孝太郎	多言語の看板	40	インターネット	多言語の看板	多言語の看板	6月14日(木)8人分
	村上 真直哉	多言語の看板	40	インターネット	多言語の看板	多言語の看板	6月14日(木)8人分
V組	藤田 孝太郎	多言語の看板	40	インターネット	多言語の看板	多言語の看板	6月14日(木)8人分
	村上 真直哉	多言語の看板	40	インターネット	多言語の看板	多言語の看板	6月14日(木)8人分
W組	藤田 孝太郎	多言語の看板	40	インターネット	多言語の看板	多言語の看板	6月14日(木)8人分
	村上 真直哉	多言語の看板	40	インターネット	多言語の看板	多言語の看板	6月14日(木)8人分
X組	藤田 孝太郎	多言語の看板	40	インターネット	多言語の看板	多言語の看板	6月14日(木)8人分
	村上 真直哉	多言語の看板	40	インターネット	多言語の看板	多言語の看板	6月14日(木)8人分
Y組	藤田 孝太郎	多言語の看板	40	インターネット	多言語の看板	多言語の看板	6月14日(木)8人分
	村上 真直哉	多言語の看板	40	インターネット	多言語の看板	多言語の看板	6月14日(木)8人分
Z組	藤田 孝太郎	多言語の看板	40	インターネット	多言語の看板	多言語の看板	6月14日(木)8人分
	村上 真直哉	多言語の看板	40	インターネット	多言語の看板	多言語の看板	6月14日(木)8人分

ろにある今回の課題にぴったりのバザールカフェ⁶⁾、3番目に多いのがコリアタウンだった。今年度は個々の要望に応じて、コリアタウンとバザールカフェの現地調査に付き添った。

また兩年度とも、他の生徒の発表をしっかりと聞いて学びを共有するために、新しく学んだことや発表の要点を書き記すプログラムをクラスごとに作成した(表3)。

4.2 生徒の作品とそこから見えること

2004年度の特別展を見学しての発表は、授業内容と若干重なる場合もあったが、展示内容を要約し、発表の仕方に工夫が見られたのが特徴だ。例えば、日系ブラジル人・ペルー人の高校生が作成した「ミューラル」について紹介したもの(写真1)、在日コリアンの都道府県別人口と展示物で印象に残った民族衣装と蒸し器やうすを大きなイラストにして発表したもの(写真2)、在日ブラジル人について人口増加の様子をグラフにして発表の冒頭に用いたもの(写真3)、在日外国人の子どもたちが楽しみにしていることをクイズ形式で発表したもの、老華僑・新華僑などのキーワードをB4用紙に掲げながら在日中国人について発表したものなどがあげられる。

南京町を現地調査した生徒の発表は異なる文化を楽しんだものが多い。南京町の歴史から始めて、現地で撮影した多数の写真を紙芝居形式で見せながら現況をリアルに報告



写真1 ミューラルについて

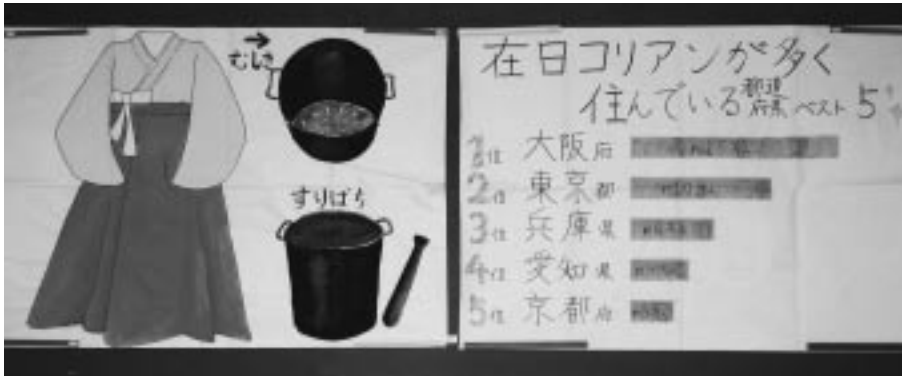


写真2 在日コリアン

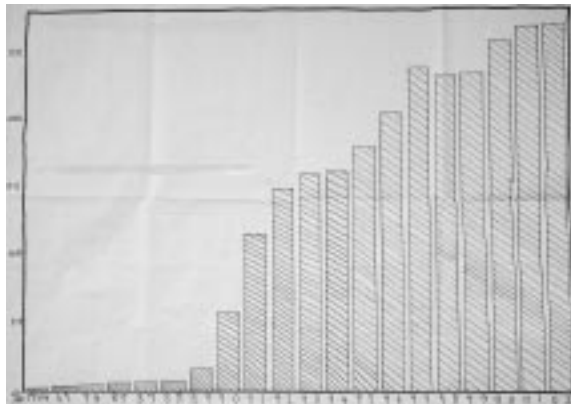


写真3 在日ブラジル人について

したり、「南京町食べ歩き」(写真4)のように食べ物にテーマをしばったものもいくつかあった。今年度、画期的だったのは南京町の調査でも在日中国人へのインタビューを取り入れた作品が出てきたことだ(写真5・6)。身近なところにある中華料理店を訪ねた場合にも同様の傾向が見られるようになってきた。

多文化共生社会の実現のために、食べ物などの文化を楽しむことから、もう一歩踏み込んで欲しいと願う。そういう点で、コリアタウンを調査地域に選んだ作品には、そこで生活する人の見える発表が多かった。例えば、これまで近くにあっても訪ねたことのなかったコリアタウンを訪ねた生徒が、そこでお店を切り盛りする在日コリアン二世の女性から話を聞いて作成した作品(写真7)では、最後に「鶴橋高麗市場はやはり独特な雰囲気を持っていて、細くて暗い路地裏のようなところはビクビクしながら歩きました。でも帰りに同じところを通っても何も感じませんでした。(コリアタウンのお店で出会った人のおかげで)韓国は近寄りやすい国というイメージを持っていたのがなくなったから」と感想を述べている。さらに今年度は、2人の男子生徒が、在日コリアン



写真4 南京町食べ歩き



写真5 南京町について1

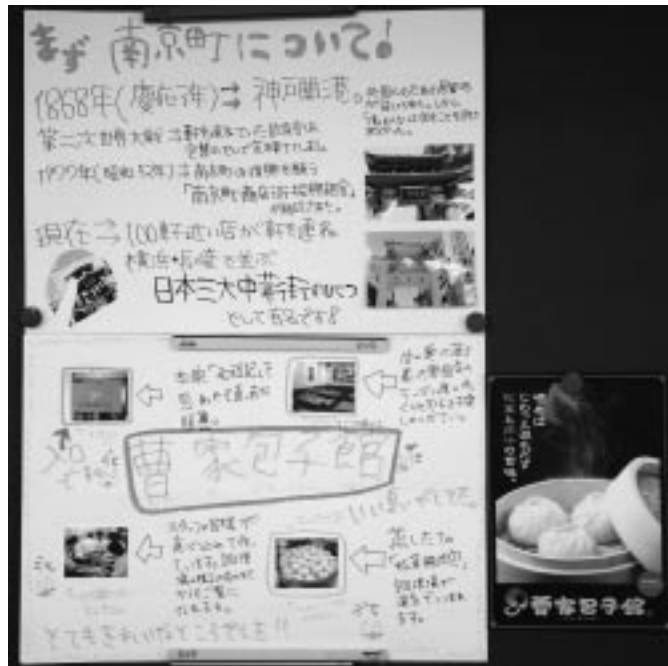


写真6 南京町について2



写真7 KOREAカルチャーを知る ～in 鶴橋～

三世の女性が自分の子どもの進学について語る話から「偏見」について考えたり、民族学校に通う中学生の女の子に学校の様子を聞くことができた作品（写真8）があった。彼らも「恐いイメージを持っていたけど、着いてみるとのどかで気持ちがやわらぐような町並みでした。お店の人はとても親切で、ますます親しみがわき、帰る頃になるとこの町が好きになりました。」と述べ、自らマイナスのイメージを払拭している。また2人の女子生徒は、在日コリアン二世の男性から、お店の成り立ちや韓国の食材のこと、また植民地時代や戦後の体験を聞きながら、「共生」について考える機会も得て発表につなげた（写真9・10）。

ひとりでブラジル専門店を訪れた生徒のレポートには、「店員さんもお客さんもすべて外国籍の人らしく、怖くてすぐに帰りたくなったけど、そのお店は故郷を遠く離れた日本で、祖国を懐かしむことのできる憩いの場になっているのかもしれない。」とありのままの感想の後に、相手の立場について想像力を働かせているところに、心が開いていく兆しを感じられた。

バザールカフェについての発表は、料理の紹介に加えて、在日外国人の雇用の場を生み出す運営の仕方や、バリアフリーの内装について紹介している（写真11・12）。そこには発表のねらいとしたお互いの違いを認めて尊重しあう社会をめざす取り組みをみつけることができる。中には、発表までに3回もバザールカフェを訪ねて、最後は厨房に入ってボランティアに参加したことも含めて紹介している生徒たちもいた。



写真8 生野のKOREAを訪ねて

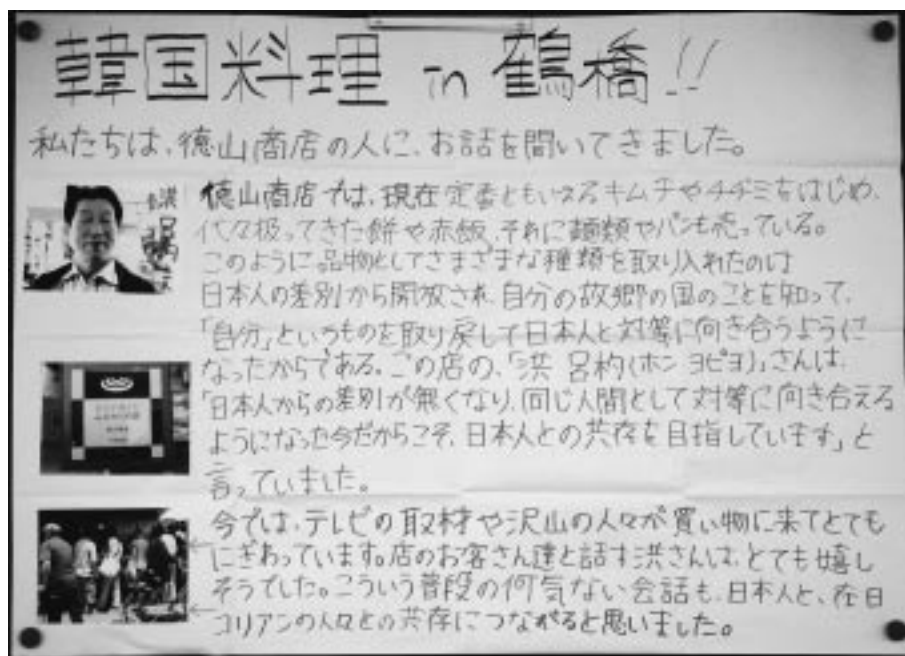


写真9 韓国食材 in 鶴橋！ 1

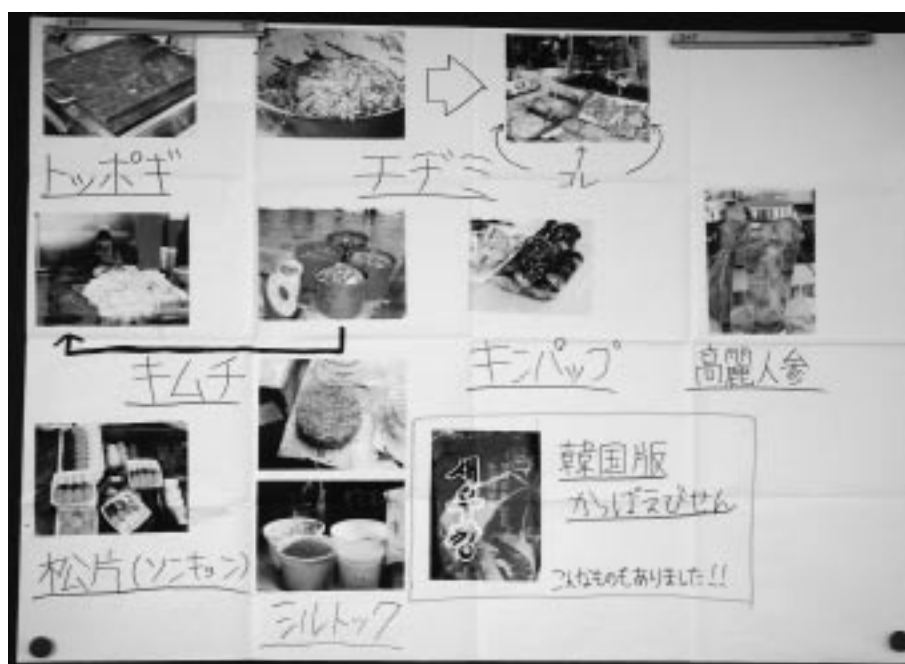


写真10 韓国食材 in 鶴橋！ 2



写真11 バザールカフェ1

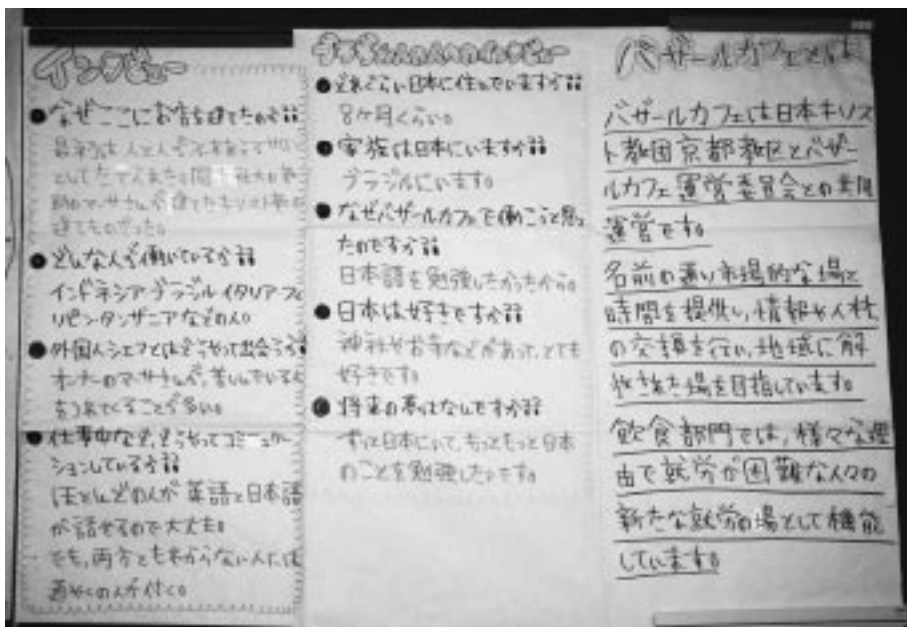


写真12 バザールカフェ2



写真13 楽しいぞ!! 東九条マダン

小学生の時の身近なことをテーマに取り上げたものとして、在日ブラジル人のクラスメートの紹介に加えて、草津市議会の答弁をインターネットで調べて教育のあり方について提言した「草津に住む在日ブラジル人」や、東九条マダンでシルムの大会に出た時の楽しかった体験を、マダンの歴史や意義とともにまとめたもの（写真13）、また、2004年度には地元の小学校（吹田市の岸部第二小学校、京田辺市のいぶき学級、宇治市の平盛小学校）にあった日本語教室について調べたものもあった。

自分自身を語ったものとして、昨年度は在日コリアンの生徒が自分や母親のチマ・チョゴリを持ってきて紹介するという例があったが、今年度は祭祀をテーマに自分自身を語る優れた発表があった。伝統的なチェサの紹介から、現在簡略化している様子を中学生の視点で考察し、自分が韓国人だったと実感できる貴重な行事として紹介している。

この他、京都市国際交流会館を紹介したり、多言語の看板調べも特に男子生徒に人気がある（写真14）。昨年度は滋賀県の在日ブラジル人のことから始まって、米原市の「永住外国人」の住民投票について調べた作品（写真15）もあって、課題プリントの具体例にはない興味深いテーマを捉えている生徒もいた。

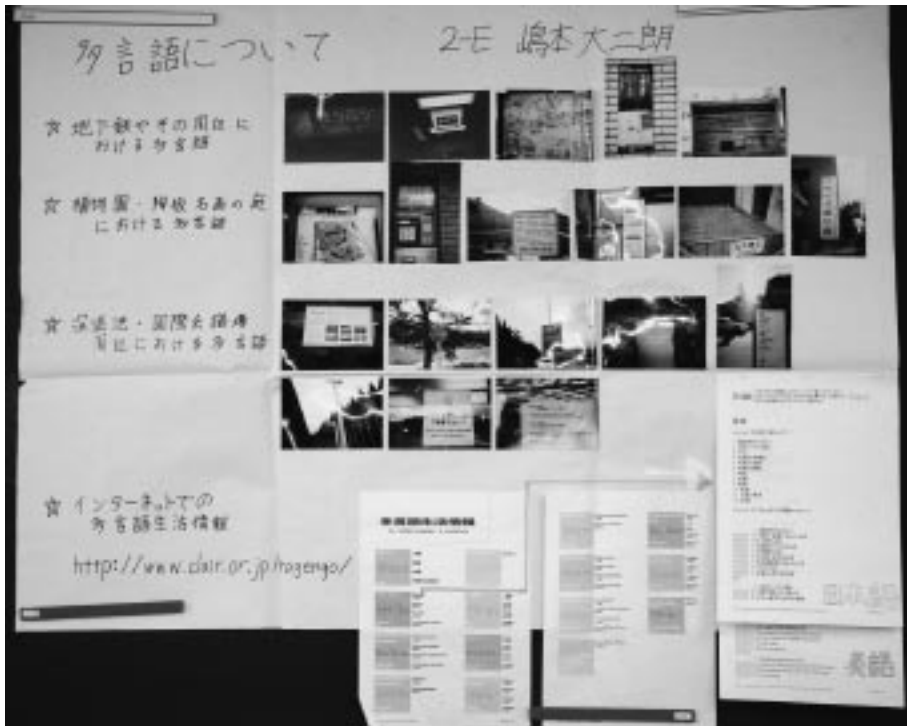


写真14 多言語の看板

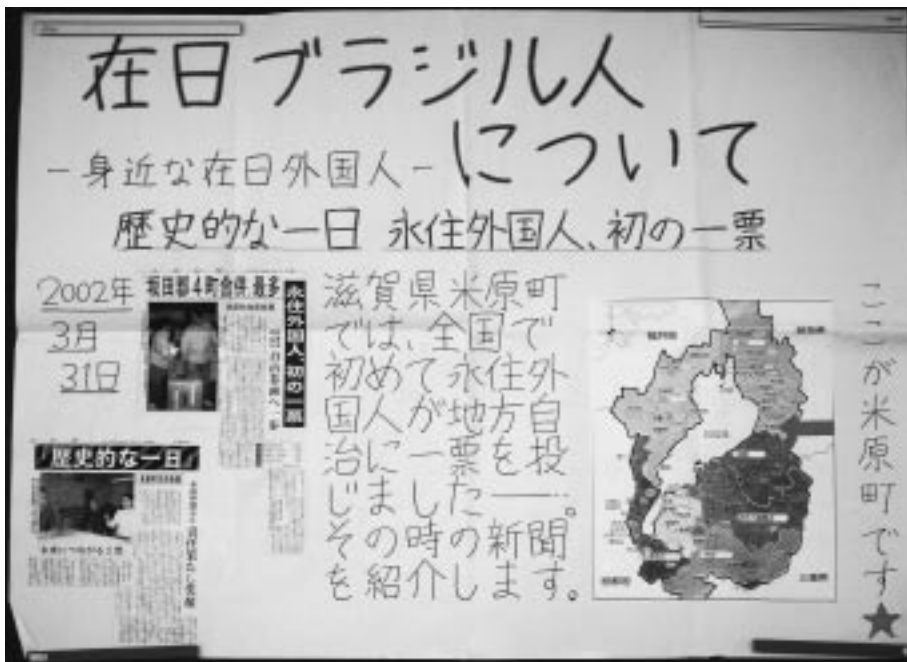


写真15 身近な在日外国人

5 特別展「多みんぞくニホン」の教育現場における意義

5.1 教員の学び（授業づくり）の支援

まず、「多みんぞくニホン」と題された特別展が国立の博物館で行われたという事実は、授業のカリキュラムに取り込む上で役立った。そして、何をどのように教えるか、特別展解説書を繰り返し読みながら学習した。授業実践の中で上げたように、解説書の小谷（2004）の文章や古屋（2004）の表や図など、資料としておおいに活用した。

また、根本的なところで、多民族化への過程について教える時、在日コリアンから在日中国人というふうに進めていったが、この枠組みは展示から学んだ。さらに枠組み以前に、何を採用し、何を採用しないのかは大きな問題となるが、このことに対して庄司はあらかじめ断りをしてきている（庄司 2004：13）。今回、アイヌや沖縄を扱わないことに対して、「実際、日本の文化の多様性は、今に始まったものでもないし、単一民族論がそれを無視しおさえてきたことも理解している。」と、そのことを押さえた上で展示全体の枠組みがつくられている。授業でも、2年生の別の単元で、沖縄や北海道のアイヌから学ぶ時間をしっかり設けている。

最後に、この展示が出来上がるまでのプロセスに私たちは多いに学ぶところがあると思う。庄司（2004：14）にあるように、この特別展は展示の対象となるコミュニティを含め、館外のような人が、企画から資料の収集、展示まで深く関わっていた。多様な人びとの参加によって生み出される豊かさは、展示後の研究会の様子からも垣間見ることができた。そして改めて、プロセスを大切にす姿勢を、学習や学校行事などさまざまな学校生活の場面で生かせるよう心に刻んでおこうと思った。

5.2 生徒の学びを支援する

2004年度については課題を展示期間にあわせたので、90人近い生徒が特別展を見学し、直接発表に役立てた。2005年度、展示がなくなっても、このような特別展が開催されたという事実がしっかり刻まれた結果、多くの生徒が社会の中に調査対象をみつけて課題発表した。生徒自らが学んだ内容については4.2で既に紹介したとおりだ。特別展の解説書やポスターは残り、大型ポスターはこの先何年かは、この単元の導入部分に使えるだろう。

これは生徒にも私自身にも言えることだが、礼拝で話してくださった人や現地調査で出会った人から、多くのことを学び、エネルギーをもらう。特に2005年度は生徒の現地調査に同行して、生徒の変化を傍らで見ながら、そのことを改めて実感した。出会った人のお話から、自分の将来にも思いを馳せ、どんな自分になりたいのか、どんな社会をデザインしていきたいのか考えるきっかけを与えてくれたと思う。

6 おわりに

このようなテーマが広がりを持って学校現場に受け入れられようになることを願って、これまでの実践をありのままに記した。授業実践では、知識注入型になっている部分が多分にあり改善を要するので、来年度は在日外国人をテーマに参加型の学びができるような教材をつくりたい。今回、何と云っても一番豊かな学びをもたらしたのは生徒の課題発表だ。現地調査でインタビューに答えていただいたり、礼拝でお話いただいたり、多くの人に支えられて成り立っている単元だと思う。

最近の動きとして高校「地理A」で志賀（2005）の実践が報告されたり、これからの社会に欠かせないテーマとして、広がりが出てきているように感じている。また、今回の特別展を学校のクラブ活動でも生かした様子は織田（2005：181-183）にまとめた。

注

- 1) 京都YWCA・APTは、1991年に、滞日外国人のための電話相談サービス提供から始まり、現在は多国籍の親をもつ子どものためのプログラムと多文化共育プログラムの3つのプログラムを通して、多文化共生社会の創造に参加しようとする市民ボランティアのグループ。
- 2) 開発教育の定義については、開発教育協会『開発教育Q&A集』1998（同協会のホームページ <http://www.dear.or.jp>「開発教育ってなあに？」）にある。授業では、共に生きることのできる公正な社会づくりに参加するために「知り」「考え」「行動する」ための学習活動として、①多様な文化や価値観を尊重すること、②様々な地域が直面している問題に気づくこと、③お互いつながりあって存在していることに気づくことをねらいとしてあげている。
- 3) 『地球家族』は30カ国のふつうの家族が、家の外に出した家族の所有物とともに1枚の写真に収まっている。巻末にはそれぞれの家族の詳細な情報もある。フォトランゲージ版はERIC国際理解教育・資料情報センターから発売されていた。さまざまな参加型の授業が考えられるが、私は2002年度開発教育入門セミナーで丸山まり子氏（開発教育研究会運営委員・小学校教諭）が行った「もしもホームステイするなら」というワークショップを中学生向きにアレンジしている。
- 4) 1年生では、朝鮮総督府を設置し、土地調査事業から始まって、皇民化政策（皇国臣民の誓いの強要・神社参拝の強要・朝鮮語の使用禁止・創氏改名など）や強制連行に至るまでを、[尹東柱の生きた時代]として学ぶ。ここでもう1度在日コリアンの多い理由とつながるように復習する。
- 5) 同志社大学校友会コリアクラブは1992年に設立された。当時、在日社会を二分した活動が多かった中で、設立当初から「ワンコリア」を掲げるクラブだった。尹東柱の詩を読む会から始まって、同志社大学の今出川キャンパスの1995年の詩碑建立につなげたのも活動の成果のひとつ。
- 6) バザールカフェは同志社大学今出川キャンパスの西側にあり、日本キリスト教京都教区とバザールカフェプロジェクトによって1998年6月にスタートした。立ち上げからHIV/AIDS関連団体、滞日外国人支援団体、牧師、宣教師、芸術家、教員など様々な人たちが関わって

る。1999年9月から毎週木・金・土の営業を始めた。主に各国の料理をつくる滞日外国人シェフに給料が支払われ、ほとんどのスタッフはボランティアとして働き、運営されている。

文 献

織田雪江

2005 「国立民族学博物館をクラブ「かるちゃんぶる部」の活動に活かす」森茂岳雄編『国立民族学博物館を活用した異文化理解教育のプログラム開発』国立民族学博物館調査報告56：171-186。

小谷幸子

2004 「多みんぞくニホンをいきる子どもたちへ」庄司博史編『多みんぞくニホン—在日外国人のくらし』大阪：千里文化財団，16-17頁。

志賀照明

2005 「身近な地域の国際化を考える・「神戸のエスニシティ」—高校における授業実践—」『兵庫地理』50：25-35。

庄司博史

2004 「いずれ、おとずれる共生社会のために—多民族化の息吹をつたえる」庄司博史編『多みんぞくニホン—在日外国人のくらし』大阪：千里文化財団，6-14頁。

人権NPO法人ダッシュ

2002 『新しい人権教育のしくみづくりへ～部落から人権文化のまちづくりの発信～』（DASH BOOKLET）人権NPO法人ダッシュ。

古屋 哲

2004 「管理から共生へ—ニホンはどこまで「多みんぞく」になったか」庄司博史編『多みんぞくニホン—在日外国人のくらし』大阪：千里文化財団，30-40頁。

マテリアルワールド・プロジェクト

1994 『地球家族 30か国にふつうの暮らし』東京：TOTO出版。

森茂岳雄編

2005 『国立民族学博物館を活用した異文化理解教育のプログラム開発』国立民族学博物館調査報告56。